ISSN 1880-0394

Annual Bulletin Report 2018

東海大学文明研究所所報 2018

巻頭言

国際シンポジウム「文明対話」について

田中 彰吾
文明研究所所員
現代教養センター・教授

例年この所報には、東海大学ヨーロッパ学術センターで開催している国際シンポジウムの簡単な報告を書かせていただいている。今年度は開催が 2019 年 3 月 14 ～ 15 日に予定されており、終了後に報告を書くとこの所報への掲載がかなわない。そこで、今回は巻頭言として国際シンポジウムについて書かせていただくことになった。この機に、これまでの経緯と今年度の予定について記しておきたい。

文明研究所では、2015 年度から「文明対話」を趣旨とする国際シンポジウムをこれまで毎年度開催している。初回は「1st Civilization Dialogue between Europe and Japan」と題して 2015 年 11 月 13 ～ 14 日に開催された。企画にあたって、東海大学が 2014 年度～ 2018 年度の中期目標として国際的レベルでの研究拠点の確立を掲げていたことが背景にあった。ヨーロッパに研究・教育施設を持つ本学の強みを活かして、ヨーロッパ各地の研究者に講演者として来訪していただき、ヨーロッパ学術センターと文明研究所の共催という形で実現にこぎつけた。

シンポジウムのタイトルにある「Civilization Dialogue」（文明対話）という名称は、平野葉一副学長の発案によるものだった。今日の世界では、いわゆるポストコロニアル化が進行して欧米諸国の影響力が低下したことで、各地域に根ざす文化および文明が復興しつつある（中国やイスラームはその例である）。その一方で、地球全体として見ると温暖化を始めとする各種の環境問題が深刻化しつつあり、国と地域を超えた協力がますます不可欠になりつつある。そうした中で「持続可能な発展」を追求するには、たんに現実の政策的課題を解決することだけでなく、価値の次元まで踏み込んで、地球上の諸文明が蓄積してきた叡智を持ち寄り、自然と調和する地球文明のあり方を模索する必要があるだろう。このような問題意識のもとで日欧の研究者が集い、文明の諸側面について分野を超えた対話を行うことが目指された。

こうして始まった第 1 回のシンポジウムは、文明に焦点を当てたシンポジウムと基調講演各 1 件、東西の文化を考えるワークショップ 1 件、日欧の歴史と文化に関する個人研究発表 5 件、というプログラムで、二日間に渡って活発な議論が繰り広げられた。個人的には、ペーター・パンツァー氏（ボン大学名誉教授）が 19 世紀ヨーロッパ人の見た日本を論じた講演「European perceptions of Japan」が日欧文明の出会いの意味を深く考えさせてくれる内容を含んでおり、印象深かった。

第 2 回のシンポジウムは、「2nd Civilization Dialogue between Europe and Japan」と題して、少し時間を空けて 2017 年 3 月 3 ～ 4 日に行われた。第 1 回で基調講演を実施したルカ・タテオ氏（オールボー大学准教授）の手厚い協力を得て、オールボー大学文化心理学研究所との共催イベントとすることができた。大学院生による発表 6 件、特別講義 2 件、基調講演 2 件、シンポジウム 2 件という構成で、大変充実したプログラムであった。初日に行われた東海大学とオールボー大学の合同セミナーは、双方とも第二言語である英語を用いているにもかかわらず白熱していた。歴史、文化、人間観など議論は多岐に亘ったが、日欧の研究者（とその卵）が相互の文化的差異を尊重しつつも踏み込んで議論する様子は、まさに「Civilization Dialogue」という名称にふさわしいものだった。

第 3 回のシンポジウムは「3rd Dialogue between Civilizations」（文明間対話）とタイトルをやや変更し、2018 年 3 月 8 ～ 9 日に開催された。過去 2 回の個人発表にはヨーロッパや日本以外の地域を主題とするものも多く、「日欧間の文明対話」ではタイトルが狭すぎるため、「諸文明間の対話」を意味する名称に変更した次第である。プログラムは、特別講義 1 件、シンポジウム 3 件、個人発表 7 件という構成であった。シンポジウムはそれぞれ、環境問題に焦点を当てたもの、日本文化の再考を試みるもの、人間観と文化的背景を考えるもの、という構成になっており、このシンポジウムの開催当初の理念を具現する内容にかなり近づいてきたとの感慨を深くした。

第 4 回は、「4th Dialogue between Civilizations」と題して、2019 年 3 月 14 ～ 15 日に開催される。第 3 回の経験を生かして、今回も環境問題を問うシンポジウム 1 件、日本文化の再考を試みるシンポジウム 1 件、文化・文明と人間観を考える基調講演 2 件を予定している。これまでの議論にも増して、文明をめぐって広く深い議論が交わされることを期待している。

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創設者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える問題、これからの文明のあり方について総合的に研究する機関です。

当研究所の発足は 1959 年に遡りますが、2001 年の新文明研究所の設立後は、「21 世紀文明の創出」という研究テーマのもと、2013 年度まで、おおよそ 3 年を 1 期とする研究プロジェクトを策定し、研究を推進してきました。第 1 期（2001 年度～ 2004 年度）は「現代文明の展開と社会文化的多様性」、第 2 期 (2005 年度～ 2007 年度) は「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」、第 3 期 (2008 年度～ 2010 年度) は「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」、第 4 期（2011 年度～ 2013 年度）は「創造すべき 21 世紀文明」でした。2014 年度からは、本学の第 II 期の中期目標（2014 年度―2018 年度）を受けて、「文明とグローバリゼーション」をテーマとして掲げ、コア・プロジェクトとして「アイデンティティの多様性と共生」、「グローバリゼーション下での社会システムの変容と再構築」、「震災復興と文明」、「文明遺産をめぐる課題」、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」の 5 つのプロジェクトを実施しました。

2016 年 4 月の総合社会科学研究所の設置に伴い、文明研究所の研究活動は人文学を中心に進めていくことになり、プロジェクトについても再編成を行いました。2016 年度は、21 世紀に継承・展開すべき人文学の構築と、本学が所蔵する文明遺産の整備・研究・活用を 2 つの柱として、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」、「20 世紀人文学の方法論的再検討」、「文明遺産をめぐる課題 2 」、「東海大学所蔵古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）の公開に向けての基盤整備」の 4 つのプロジェクトを実施しました。2017 年度、2018 年度も二つの柱に即して、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」、「20 世紀人文学の方法論的再検討」、「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」(2016 年度の 2 つのプロジェクトを統合) を推進するとともに、学部を超えた共同研究である「森里川海研究プロジェクト」、「戦後大衆文化に関する基礎的研究－緒形拳関係資料の整理をめぐって－」についても、本研究所の課題として展開しています。

さらに、2015 年度から主催してきた国際シンポジウム「文明間対話」の第 4 回を今年度も開催し、国際交流の継続と、若手研究者や院生の育成をはかっています。

2018 年度の研究プロジェクト

「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」

（コア・プロジェクト 1）

平野葉一・沓澤宣賢・田中彰吾
中川久嗣・吉田欣吾・鷹取勇希
服部泰・中村朋子

本プロジェクトは、東海大学の特色である文明研究を基盤とした未来型の人文学構築を目指す研究プロジェクトで、2018 年度が 4 年目となる。これまでの 3 年間の研究をふまえ、今年度も人文学学問の枠組みを超えて科学史、芸術、言語社会学、記号論、心理学などの各視点を複合させた視点から人文学研究の手法について検討を重ねた。とくに、2018 年度は文学部の人文学を中心とする改組を受け、文学部ならびに文学研究科文明研究専攻とのより一層の連携を深めることとなった。そのため、文明研究専攻の大学院生ならびに博士論文を準備している専攻出身者の参加による研究会を充実させ、学会参加や研究発表を促すこととなった。

具体的には、2018 年度全体をとおしてクローバーや伊東俊太郎などの先行研究を再考するとともに、アンダーソン、スミスやキムリッカの研究からグローバル化と多様性に関する研究を深化させることで、「文化」、「文明」の意味についての再検討を進めた。これらの研究成果の発表として、2015 年度から開催している国際シンポジウム「第4回文明対話」を 2019 年 3 月にデンマークの東海大学ヨーロッパ学術センターで開催した。なお、本プロジェクトの一環として 2017 年度に開催された国際シンポジウム「第3回文明対話」での各発表を論文の形で整理し、2018 年 3 月発行の『文明』に掲載した。

「20 世紀人文学の方法論的再検討」

（コア・プロジェクト2）

山本和重・田尻祐一郎・村田憲郎・馬場弘臣
川﨑亜紀子・篠原聰・斉藤仁一朗

本プロジェクトは、2016 年度から文明研究所が人文学を中心に研究活動を展開することになったことを受けて、立ち上げた研究プロジェクトである。人文学に対する社会的評価が低下するなかで、その活性化のために、20 世紀人文学の方法論を歴史的な視点からふりかえり、21 世紀に継承すべき方法をさぐることを目的とした。その問題関心の背景にあるのは、19 世紀的な工業化型近代化や技術万能主義に照応した科学主義的人文学に対して、20 世紀には、哲学、歴史学、民俗学、教育学など、さまざまな領域から反省と新たな方法論が提示されてきたが、それらの成果が必ずしも今日の人文学に継承されておらず、そのことが人文学における方向性の喪失状況、ひいては人文学に対する社会的評価の低下とつながっているのではないかという認識である。こうした認識の可否を含めて、学問領域を超えた共同討議によって、人文学の可能性を探ろうとするものであった。2016 年度と 2017 年度、計 6 回の研究会における議論のなかで、身体性（感性）という問題が 20 世紀人文学の大きな特徴（論点）として浮かび上がり、今年度はそれを受けて、下記の2回の研究会を開催した。

第7回（2018 年 7 月 7 日）：篠原聰氏「ミュージアムの現代：「触覚」を活用した新たな博物館活動の実践」。コメント　間島秀徳氏（日本画家、信州大学教育学部教授）

第8回（2018 年 12 月 1 日）（課程資格教育センター主催、本研究会の共催）：シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムが「近代」を問い直す　思想史と人類学の対話」。木下長宏氏（元横浜国立大学）、広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館）

これまでの研究会でも、活字以前のコミュニケーション＝口承文芸や民間説話における即興性といったものの持つ意義を重視してきたが、今年度の研究会活動のなかでは、これまでの 19 世紀的人文学対 20 世紀的人文学という枠組みに対して、長い歴史をもつ無文字文化が無意識の伝統として現代の文化にも影響を及ぼしているという、より幅広い枠組みが浮上してきている。年度初めには、「20 世紀人文学における身体性をめぐって」というテーマで総括的なシンポジウムを開催する計画であったが、論点を再度整理して、次年度にまとめのシンポジウムを開催したい。

「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」

（コア・プロジェクト3）

山花京子・吉田晃章・篠原聰・田口かおり

本プロジェクトは学内に収蔵されている古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）（以下、エジプト・コレクションとする）と、アンデス先史文明に関する文化財（以下、アンデス・コレクションとする）の保存と活用にかかわる環境整備を目的としている。

以下では 1）アンデス・コレクションと 2）エジプト・コレク

ションについてそれぞれの進捗状況を記し、3）では、2018 年度末より 2019 年度にかけて開催される「古代エジプトとアンデスの色彩」企画展の準備状況を記す。

1）アンデス・コレクション

本年度初頭に閲覧申請や展示会貸し出しなどに備えて、内規を作成した。

プロジェクト開始年度より懸案となっていた収蔵庫の環境については、2017 年度の環境整備が功を奏して、庫内の状態が落ち着きつつある。

2018 年度における庫内のクリーニングや遺物保存については、歩行性侵入昆虫対策として扉下部の隙間に扉用ブラシを設置し、飛翔性侵入昆虫の捕獲するためのライトトラップも設けた。昨年度設置した入り口内側のシャワーブースや粘着性マットなども効力を発揮しており、出入り口付近からの虫の侵入や、外部から庫内へもたらされる汚染をできるだけ減らす対策を施している。さらに、庫内の空気の循環を向上させるために、エアーサーキュレーターを 3 台設置し、奥行きの深い織物資料の棚の深部にまで空気を循環させる努力を行っている。

本年度は年度初頭に「2018 年度総合研究機構研究費」より特別補助金が支給されることが決定した。この補助金により、本学文化財を広く周知するためのカタログ（紙媒体及び電子媒体）作成の前段階となる遺物の写真撮影行うことになった。写真撮影の対象は織物資料（約 450 件）と貴金属製品および装身具（約 200 件）である。アンデス・コレクションの織物資料には、長さ 5m を超すものもあるため、写真撮影には 17 号館ネクサスホールを 8 月下旬から 9 月下旬までの約 1 か月借り切り、山本所長を始め五十嶋所員、馬場所員、コア・プロジェクト 3 のメンバー全員、そして博物館学芸員実習に参加した学生総出で織物の運搬を行った。アンデス・コレクションの織物の公開と写真撮影については、東海大学新聞ネット版に掲載されている（https://www.u-tokai.ac.jp/academics/undergraduate/cultural_and_social_studies/news/detail/post_26.html）。

さらに、同補助金により、2016 年度～ 2017 年度の環境改善作業の際に懸案となっていた、保存箱の取り換えを行うこととした。土器の保存箱は現在約 1000 箱あるが、それらすべての箱と遺物を点検し、早急に箱の取り換えが必要なもの約 270 箱を抽出した。現在、業者により採寸作業が完了しており、3 月末日までには現在の段ボール箱から中性紙保存箱への取り換え作業が行われる。

本コレクションは活動の主軸がまだ保存や環境整備に置かれてはいるが、コレクションを学内外にアピールするために工学部との共同研究が始められている（活動報告参照）（東海大学新聞 8 月 1 日号に掲載 http://www.tokainewspress.com/view.php?d=1588）。

さらに、アンデス関連の勉強会として、アドバイザーである大平秀一教授を講師として迎え、「文明・歴史・文化財：文化庁委託事業『エクアドル地震 2016』による被災博物館支援　研究プロジェクト」の課題と問題点」が 2019 年 1 月 28 日に行われた。

2）エジプト・コレクション

エジプト・コレクションの収蔵庫は機械制御によって常時室温 23℃、湿度 45%RH に保たれている。庫内は定期的に清掃、忌避剤散布、雑菌抑制剤散布などが行われており、2018 年度も遺物の状態に大きな変化は見られないことから、IPM（Integrated Pest Management）活動は効果をあげていると考えられる。しかしながら、脱酸素剤の交換やガスバリア袋封入については人手不足のため予定数をこなすことができなかった。

2018 年度は大阪府立弥生文化博物館の特別展「発見！古代エジプト―7 つの秘密と最新エジプト研究」（会期 2018 年 9 月 24 日～ 12 月 16 日）に 50 件の貸し出し申請があり、貸し出し業務を行った（貸出期間は 9 月 19 日～ 12 月 19 日）。さらに、2018 年 7 月より、篠原所員の協力のもと、松前記念館の平置き展示ケース 1 台にて特別小展示「イスラームのブレスレット」行っている。この展示では、AENET 収蔵品の 6 点のガラス製ブレスレットが展示されており、チャレンジセンターユニークプロジェクト AR の学生によるレプリカ展示も行われている。

5 月にはブリガムヤング大学より 2 名の研究者が AENET コレクション内のパピルス及び南アラビア語碑文の研究のために来日した（https://www.u-tokai.ac.jp/academics/undergraduate/cultural_and_social_studies/news/detail/post_18.html）。調査の成果物は近日刊行予定である。

さらに、6 月と 2019 年 1 月にはパピルス保存修復研究者及びヌビア研究者がエジプト・コレクションの閲覧・研究のために来学した。研究成果は来年度を目途に発表する予定である。

以上のように、エジプト・コレクションについては、活動の主軸が環境整備、保存から研究へと移りつつある。本年度はアンデス・コレクションの活動にウエイトが置かれたために、エジプト・コレクションの HP 更新や遺物の保管状態の見直しなどは来年度の課題となる。

3）「古代エジプトとアンデスの色彩」展示会企画

2018 年度 3 月 11 日より 2019 年度 7 月 31 日まで、東海大学湘南校舎 11 号館図書館付属展示室において、「古代エジプトとアンデスの色彩」展示会が文明研究所と付属図書館の共催、文学部後援で開催予定である。この展示は、

東海大学文明研究所が所蔵する文化財コレクションを広く一般に周知するために企画したもので、3 月、6 月、7 月、8 月のオープンキャンパス時には特別ギャラリートークも企画している。

古代エジプトについては、5 原色のエジプトでの意味や使われ方などを色別に解説する。一方、アンデスにおいては、山の神と多彩色との関連性を展示でみせる工夫を行った。全体で約 65 件の遺物を出陳する（展示替えの予定はない）。

出陳する遺物の選定、写真撮影、展示キャプションづくり、解説パネルづくり、図録作成に関しては、コア・プロジェクト 3 アドバイザーの大平秀一教授と研究員の吉田晃章講師、そして山花所員が携わっている。さらに、エジプトの展示に関してはチャレンジセンターユニークプロジェクト AR の有志メンバーが参加し、展示室作りの手伝いをした。

「森里川海研究プロジェクト」

（コア・プロジェクト 4）

中嶋卓雄・平野葉一・荒木朋洋
木之内均・福崎稔

本プロジェクトは、2016 年 4 月に震災を受けた九州キャンパスにおける震災復興を視野に入れた環境研究として 2017 年度から設置した研究プロジェクトで今年度が 2 年目となる。

九州キャンパスでは、環境省および熊本県との連携による震災復興を目指した研究活動が求められ、文明研究所としては将来的な研究所設置も視野に入れながらコア・プロジェクトとして「森里川海プロジェクト」を設置した。「森里川海」とは環境省が実施している環境教育・研究プロジェクトの名称で、山地から平野の河川を通して海までの全体の環境を検討することを目的としている。今年度は環境省が推進する「環境研究総合推進費」に、九州大学、慶応大学とともに「阿蘇をモデル地域とした地域循環共生圏の構築と創造的復興に関する研究」の計画策定を進めたが、結果としてその計画に「熊本地震による阿蘇カルデラから熊本地域の地下水を中心とした水循環への影響の評価に関する研究」というテーマで採択を受けた。実際にはこの研究が 2019 年 4 月から開始される。なお、2019 年 4 月から文明研究所九州分室の設置が決まり、九州の森里川海研究の拠点となることが決定されている。

本プロジェクトの一環として「環境 QOL の検討」なるテーマを設定しているが、これに関しては 2018 年 3 月の国際シンポジウムにおける研究発をさらに展開させ、また九州キャンパスの「環境 QOL 研究グループ」（総研プロジェクト）とも連携し、2018 年 8 月に中国で開催された ICICIC 会議にて研究報告を行っている。今後は環境省プロジェクトとも連携しながら、地域循環共生圏構築も視野に入れながら研究の継続、展開をはかる計画である。

「戦後大衆文化の基礎的研究
ー緒形拳氏関係資料の整理をめぐってー」

（コア・プロジェクト 5）

馬場弘臣・紅谷龍司・兼平賢治・神谷大介

プロジェクト2年目にあたる 2018 年度は、緒形拳邸の資料調査と整理作業を進めた。緒方邸の調査は 6 回を数え、その度ごとに実験棟F館2階の共同会議室に資料を移送し、臨時職員の岡崎佑也氏を中心に資料の整理作業を行った。資料整理の成果として、2019 年 2 月 25 日段階で、パンフレット 669 冊、台本 199 冊、ビデオ 436 本、蔵書 1,612 冊をファイルや専用のケースなどに整理し、資料目録として PC に入力した。また、スクラップブックが 101 冊あり、この細目録についても入力作業を始めた。スクラップブックは 1965 年に緒形氏が NHK 大河ドラマ「太閤記」で豊臣秀吉を演じて以降、没年にいたるまでのものが揃っている。業者に製作を依頼しているだけに、新聞の全国紙・地方紙はもとより、当時の芸能雑誌や一般誌などさまざまな刊行物に掲載されたものが網羅的にスクラップされている。これらをもとに昨年度に引き続き、緒形氏の出演作品目録作成を進めた。これも同日段階で、テレビドラマ 212 本、映画 90 本、舞台 260 本、ドュキメンタリー・ナレーションその他 22 本、計 682 本の出演を確認した。資料としては、この他にも写真、ポスター、パネル、小道具などの物品資料、緒形氏の書画、作陶作品など多岐にわたっていることから、さらに整理を進めていく必要がある。

資料の調査・整理を進めていく過程で、2019 年 10 月～ 11 月に付属図書館 11 号館展示室で、また、2020 年 10 月～ 11 月に横浜市歴史博物館で展示会を開催することが決まった。さらに神奈川県マグネット・カルチャー局および同県演劇資料室とも協力していくこととなった。このような資料整理作業や展示会活動を推進するとともに、本プロジェクトの主眼である戦後大衆文化の展開過程を深めるための研究団体として「緒形拳研究会」を立ち上げた。現在は、プロジェクトメンバーはもとより、緒形氏のご家族や関係者、本学の大学院生、学部生を中心として研究計画を進めているところである。今後は一般の方も参加できるような形で研究会を発展させていきたいと考えている。

『文明』第 23 号（2019 年 3 月発刊）
内容のご紹介

巻頭言

- 語源から考える「文明」
（田中彰吾）

国際シンポジウム

- Special Issue：Dialogue between Civilizations
（Yoichi Hirano and Shogo Tanaka）
- The 1873 Vienna World Exposition and Japan's Participation：Focusing on Japan's Industrial Promotion Policy in the Early Meiji Period
（Nobukata Kutsuzawa）
- The Austrian photographer Michael Moser (1853-1912)and early Meiji-Japan with a special focus on the World Expositon in Vienna in 1873
（Nana Miyata）
- The World Expositon in Vienna in 1873：Japan's role and influence among all participating nations
New Sources
（Peter Pantzer）
- The Role of Symbols in the Formation of the Nationalism in France：On Caesar and Vercingetorix
（Mina Adachi）
- A Case Study of the Kaka'ako District in the Island of O'ahu：From a Consideation of the Gramscian Notion of *Counter-Hegemony*
（Yuki Takatori）
- The Efficient Use of Cultural Resources in Ethnic Tourism：Case study of Southeast Asian Countries
（Nana Okayama）
- The house as symbolic representatiom of the self
（Silvia Wyder）
- The Relation Between Human Activities and the Natural Environment：An Essay on the Introduction of Environment-Related QOL
（Takuo Nakashima and Yoichi Hirano）

論文

- 相模国小田原藩における大災害からの復興と改革・仕法 ── 吉岡家の俸禄米をめぐって ──
（馬場弘臣）

活動報告

「エジプト・コレクションとアンデス・コレクション」

山花 京子

2018 年度のプロジェクト活動の中で、学部教育などとの連携を行っている 1）工学部との共同研究、2）授業内でのコレクション活用、3）学生による松前記念館での展示、について報告を行う。

まず 1）の工学部との共同研究は、2017 年度より継続している金属接合部分のロウ付け研究（工学部材料科学科　宮沢研究室）のために、高輝度光科学研究センター Spring-8 の研究課題に申請し、採択された。そして 7 月 12 日と 13 日に宮沢研究室の学生とともに兵庫県に赴き、高エネルギー X 線 CT 装置を使った解析を行った（東海大学新聞ウエブ版 https://www.u-tokai.ac.jp/academics/undergraduate/cultural_and_social_studies/news/detail/spring-8.html）。研究成果は来年度に公表の予定である。本年度に入って新規に始めた工学部（マイクロ・ナノ研究開発センター）との共同研究は、本学 12 号館のイメージング研究センターにて行われた、アンデス・コレクションの土器を解析するプロジェクト「アンデスの音を再現プロジェクト」である。X 線 CT スキャンによって、アンデスの土器を透過解析し、アンデス・コレクションの中でも音の出る土器について構造の解明を目指している（東海大学新聞 8 月 1 日号 http://www.tokainewspress.com/view.php?d=1588）。2018 年度中に 12 点の土器を解析し、そのうち 4 点については、「楽器」として作られたことが分かっている。この研究には、工学部、理学部から様々な専門家とその研究室の学生が参画しており、X 線 CT でスキャンした情報をもとに、調査対象の楽器の空洞を物理的に計算し、理論上の音を再現した。その理論値を検証するため、3D プリンターにて同寸レプリカを作成するという一大プロジェクトになっている。研究は来年度以降も継続するが、初期段階の成果を来年度に発表する見込みである。

2）については、プロジェクトのメンバーである吉田晃章研究員の「アンデス地域の諸文明」の授業、篠原聰所員の学芸

TICAR（イメージング研究センター）にてアンデス土器の解析

員課程「博物館実習」、そして山花京子所員の「外国考古学地域講義Ｃ」および「文物に学ぶアジア」の授業にて、エジプト及びアンデスのコレクションを学生たちの学びに活用している。学生たちは本物の遺物に触れることで、自分たちの遠い祖先が一つ一つ手間暇をかけて作った物の精巧さに驚き、その歴史の重さを実感し、貴重な遺物の取り扱いを学んだ。このように、実際の遺物を目の前にして授業を行うことで、学生たちの感性に訴えることができるため、机上の学習よりもはるかに高い学習効果が得られたと確信している。

3）7 月より、松前記念館にて小展示「イスラームのガラス腕輪」を開催。この展示は篠原聰所員の協力のもと、チャレンジセンターユニークプロジェクト AR のメンバーによる活動の一環として、山花所員が指導を行った。AENET コレクション内の遺物のガラス製腕輪を 6 点出陳し、そこに解説パネルとレプリカを展示した。

「文物に学ぶアジア」授業風景

学部教育等との連携

「史料管理学演習」（2019 年 2 月 18 日～ 22 日）

馬場 弘臣

今年度も昨年度に引き続き、研究プロジェクト5「戦後大衆文化の基礎的研究－緒形拳氏関係資料の整理をめぐって－」と、文学部歴史学科日本史専攻開講のウィンターセッション科目「史料管理学演習」とのタイアップ授業を行った。本年度の履修生は、2年生8名（男子2名・女子6名）、3年生男子4名の合計 12 名であった。授業では4名ずつ3つの班に分け、各班は2人でひと組とした。

史料管理学演習は、現存する史資料の整理方法について実

緒形氏関係資料の整理

践的に学ぶための場であるので、江戸時代の古文書と明治以降の近代資料の整理を体験した上で、4日目と5日目に緒形氏関係資料の整理を行った。A班とB班は、①台本と②パンフレットをダブルフラップフォルダーに入れて資料番号や資料の種類、出所などを記入したシールを貼る作業を行った。それぞれ一定の量に達した段階でリングファイルに綴じ込み、識別のために背ラベルを貼っていく。この結果、授業前は 28 冊だった①台本のリングファイルは 40 冊まで増え、同じく授業前は 26 冊だった②パンフレットのリングファイルも 42 冊まで増えた。

C班は、緒形氏の③スクラップブックの整理を行った。スクラップブックは、業者に依頼して作成してもらっているためにファイルに綴じたものもあるが、スクラップが綴じられないままに封筒で送られてきたものや、収納の過程でバラけてしまったものも多い。これらを年月日ごとに並び替えてまとめ、台紙に貼っていないスクラップについてはダブルフラップフォルダーに入れるなどした上で、同じようにリングファイルに綴じていった。1月と2月の緒形邸資料調査で、とくにスクラップブックに綴じられていないスクラップが大量に出てきたために、この作業に時間がかかった。①台本② パンフレットの整理作業が比較的早く終わったので、最後は全員でこの③スクラップブックの整理作業に取りかかった。ただし、台紙に貼られていないスクラップブックを入れて置くためのダブルフラップフォルダーやリングファイルが足りなくなったために、作業を完了させることはできなかった。それでも授業前の③スクラップブックの数が 101 冊だったのに対し、授業後には 147 冊と 44 袋まで増えていた。

ダブルフラップフォルダーに収納

今回の授業では、4日目に緒形氏のご家族や関係者の方が来訪され、写真の整理を手伝っていただいた。こうした資料所蔵者との交流もまた、学生にとって重要な体験の場であったと思う。今回の授業では、作業は完了できなかったが、2年生の全員がこれからも手伝いたいと言ってくれた。史料管理学演習の問題点として、せっかく体験した資料整理作業をいかに継続させていくかが大きな課題であった。2019 年度秋には付属中央図書館 11 号館展示室で、2020 年秋には横浜市歴史博物館において、研究成果としての展示会を計画している。それらを実体験していくということを含めて、今回のタイアップ授業によって一つの道が開けたといえよう。

所員の活動

山本　和重
文明研究所所長、文学部歴史学科日本史専攻・教授

【報告・講演】
●「黒羽清隆『軍隊の語る日本の近代』上・下を読む」，第２回黒羽清隆研究会，2018 年 12 月 15 日
【その他の活動】
●『相武地域史研究会第 3 回シンポジウム　日記からみる戊辰戦争と地域ー明治維新 150 年ー　報告書』の編集と刊行

平野　葉一
文学部文明学科・教授

【執筆・翻訳】
● Nakasima, Takuo & Hirano, Yoichi "The relation Between Human Activities and the Natural Environment: An Essay on the Intruduction of Environment-Related QOL"，『文明』第 23 号（東海大学文明研究所）P.95-113，2019 年 3 月
● 平野葉一、吉田欣吾、安達未菜「文化・文明の相互関係に関する一考察」『東海大学紀要文学部』第 109 輯，P.1-19，2018 年

沓澤　宣賢
文学部歴史学科日本史専攻・特任教授

【執筆・翻訳】
● 書評「片桐一男著「シーボルト事件で罰せられた三通詞」『洋学史研究』第 35 号，2018 年 4 月，108-118 頁
● “The 1873 Vienna World Exposition and Japan’s Participation: Focusing on Japan’s Industrial Promotion Policy in the Early Meiji Period“『文明』第 23 号，2019 年 3 月
【報告・講演】
●「シーボルトと日本」平成３０年度中央区民カレッジ･オープンカレッジ講演会（於 . 中央区教育センター 5 階･視聴覚ホール），2018 年 11 月 10 日
●「シーボルト研究概観」（於 . 東海大学湘南校舎・11-103 教室），2019 年 2 月 23 日

田中　彰吾
現代教養センター・教授

【執筆・翻訳】
● Ｓ・コイファー＆Ａ・チェメロ（田中彰吾・宮原克典訳）『現象学入門――新しい心の科学と哲学のために』勁草書房，2018 年 7 月
● “Bodily basis of the diverse modes of the self” Human Arenas, 1(3)，pp.223-230，2018 年 8 月
● “What is it like to be disconnected from the body?: A phenomenological account of disembodiment in depersonalization/derealization disorder” Journal of Consciousness Studies，25(5-6)，pp.239-262，2018 年 6 月
●「プロジェクション科学における身体の役割ー身体錯覚を再考する」『認知科学』第 26 巻 1 号（掲載予定），2019 年 3 月
【報告・講演】（主なもの）
●「Reconsidering the symptoms of Taijin Kyofusho (TKS) from an embodied perspective」国立台湾大学・心理学部にて特別講演（台湾・台北市）2018 年 5 月
●「The lived body and motor learning: Refining Merleau-ponty’s notion of body schema」台湾国立東華大学・カウンセリングおよび臨床心理学部にて特別講演（台湾・花蓮市）2018 年 5 月
●「"My Body" as a product of interactions between the self and the other」，International Human Science Research Conference 2018 にて研究発表（アメリカ，Wofford College）2018 年 6 月
●「What is subjectively experienced in Full-Body Illusion Experiments?」，24th World Congress of Philosophy にて研究発表（中国，National Convention Center）2018 年 8 月
●「Body, Self and the Other in Taijin Kyofusho」，Conference: Time, the Body, and the Other にて講演（ドイツ，University of Heidelberg）2018 年 9 月
●「現象学と現代心理学の界面」，日本心理学会第 82 回大会・シンポジウム「もうひとつの心理学史を求めてーー近代心理学と現象学」にて報告（仙台国際センター）2018 年 9 月
●「運動学習における身体イメージの役割を再考する」，第 19 回 認知神経リハビリテーション学会学術集会にて講演（門真市文化会館）2018 年 9 月

- 「ナラティヴ・セルフの概念から考える質的研究」，日本質的心理学会第 15 回全国大会・シンポジウム「ナラティヴを通した他者理解」にて報告（名桜大学）2018 年 11 月
- 「Understanding the symptoms of Taijin Kyofusho (TKS) from an embodied perspective」，International Workshop on Philosophy of Psychiatry にて講演（東京大学）2018 年 12 月
- 「自己はどこまで脱身体化できるか？」，先導的人文学・社会科学研究推進事業「アイデンティティの内的多元性：哲学と経験科学の協同による実証研究の展開」第 1 回公開シンポジウム「自己をめぐる冒険」にて講演（東京大学）2019 年 2 月

【その他の活動】（主なもの）

- 第 83 回心の科学の基礎論研究会「田中彰吾『生きられた〈私〉をもとめて』合評会」にて討論（明治大学）2018 年 7 月
- 24th World Congress of Philosophy にてラウンドテーブル「Considering bodily boundaries from comparative perspectives in the philosophy of body and mind」の企画および司会（中国，National Convention Center）2018 年 8 月
- 科研費企画「ヘレン・ンゴ『人種差別の習慣』合評会」にて司会（立教大学）2018 年 8 月
- 第 82 回日本心理学会にて公募シンポジウム「事例研究はいかにして「客観的たりえ、他者に利用可能たりうるか？」にて指定討論（仙台国際センター）2018 年 9 月
- Consciousness Research Network (CoRN 2019) の Debate Session #1「How to collaborate philosophy and science for consciousness research」にて討論（岡崎コンファレンスセンター）2019 年 1 月

馬場　弘臣

教育開発研究センター・教授

【執筆・翻訳】

- 「相模国における在郷商人とそのネットワークー伊勢原村加藤宗兵衛と大磯宿川崎孫右衛門を中心にー」白川部達夫編『東洋大学 井上円了記念助成 人間科学総合研究所共同研究 2017 年度報告書　越後宮川新田高橋家文書の研究 Ⅰ』P.57-72，2017 年 7 月
- 「関東大震災と観光政策ー横浜復興博と箱根観光博ー」『地方史研究』第 394 号，P.38-40，2018 年 8 月
- 相模国小田原藩における大災害からの復興と改革・仕法―吉岡家の俸禄米をめぐって―」『文明』第 23 号（東海大学文明研究所）P.95-113，2019 年 3 月
- 「忘れられた歴史家、勝田孫弥―付属市原望洋高等学校の軌跡から―」『東海大学学園史ニュース』14，P.12-13，2019 年 3 月

【報告・講演】

- 「東海道の幕末維新ー明治維新 150 年ー」神奈川県寒川町民センター，2018 年 5 月 19 日
- 「相模川の渡船と寒川の村々」神奈川県寒川町民センター，2018 年 10 月 27 日
- 「資料調査・資料分析による主体的学び」東海大学教育開発研究センター第 2 回教育開発ワークショップ「主体的学びと変化する図書館」にて報告（東海大学），2018 年 11 月 29 日
- 「地域史からみた幕末維新ー小野路村組合と木曽村組合ー」東京都町田市立自由民権資料館，2018 年 11 月 4 日
- 「明治天皇の東幸と大磯宿ー記録・記憶・顕彰ー」神奈川県大磯町教育委員会（大磯町立図書館）2018 年 11 月 17 日
- 「幕末の東海道と横浜」関東学院大学「横浜学」Vol.34「横浜と東海道」（関東学院大学関内メディアセンター）2018 年 12 月 23 日
- 「矢倉沢往還と曽屋村ー交通・経済・政治の拠点としてー」神奈川県秦野市教育委員会（秦野市立桜土手古墳展示館）2019 年 1 月 26 日
- 「黒羽藩主大関増裕の改革と下之庄」栃木県益子町教育委員会（益子町中央公民館）2019 年 3 月 16 日

【その他の活動】

- 東海大学地域連携センター生涯学習講座「古文書でみる幕末維新の神奈川ー戊辰箱根戦争ー」(ユニコムプラザさがみはら)2018 年 5 月～ 6 月全 5 回
- BS11 の番組「歴史科学捜査班」第 7 回「危機管理学で迫る！富士山宝永噴火」にスタジオゲストとして出演（2018 年 11 月 12 日放送）
- 関東学院大学「横浜学」Vol.34「横浜と東海道」『横浜ウォーカー』(KADOKAWA)2019 年 2 月号
- 講演録「地域史からみた幕末維新ー小野路村組合と木曽村組合ー」『民権ブックス』32，P.30-53，2019 年 3 月

山花　京子

文化社会学部アジア学科・准教授

【執筆・翻訳】

- 横山知則・秋山泰信・山花京子他　「古代エジプトの硫黄製ビーズに関する研究」『文化財保存修復学会誌［古文化財の科学］』 第 62 号
- Blumell, L., Hull, K., and Yamahana, K., “Two Greek Papyri from the Early Roman Period in the Tokai University Collection,” 『文明研究』第 37 号

- 山花京子「古代エジプト神秘の青―ファイアンスの魅力―」『エジプト世界駅』第 14 号
- Uesugi, A., Yamahana, K., Nakai, I., Abe, Y., Kumar, M., and Dangi, V., “A Study on Faience Objects in the Ghaggar Plains during the Urban and Post ‐ Urban Indus Periods,” Heritage: Journal of Multidisciplinary Studies in Archaeology, vol. 5
- Yamahana, K., Akiyama, Y., “Archaeological and Chemical Analysis of Ancient Necklaces,” Material, Z-KAI 英語情報誌
- 山花京子「クレオパトラの肖像―孤高の女王、その激動の生涯を辿る―」『Cleopatra』, K-Ballet Company バレエ公演会解説カタログ

【報告・講演】
- 山花京子「青へのあこがれ―古代エジプトのファイアンス―」岡山市立オリエント美術館特別講演会，2019 年 2 月 26 日
- 山花京子・槌谷和義・喜多理王他 「文化財を科学する―X 線 CT スキャンでアンデス土器の音を探る」東海大学イメージング研究センター 研究成果講演会　2018 年 12 月
- 山花京子「古代ファイアンス立体造形復元成功と今後の展望」日本ガラス工芸学会　2018 年度大会　2018 年 12 月
- 山花京子「地域をつなぐビーズ―古代エジプトにおけるビーズの役割―」世界のビーズ講座特別版「人類とビーズ」 民博拠点・岡山市立オリエント美術館・パレオアジア文化史学・人間文化研究機構北東アジア地域研究・現代中東地域研究共催　シンポジウム　2018 年 12 月
- 山花京子・秋山泰伸 「文理融合研究による古代エジプト科学技術の解明（ファイアンス編①）」2018 年東海大学研究交流会　2018 年 10 月
- 山花京子他「X 線 CT スキャンによる東海大学文明研究所所蔵のアンデス土器の解析」2018 年東海大学研究交流会 2018 年 8 月
- Yamahana, K., and Akiyama, Y.,“A New Breakthrough in Replicating Ancient Egyptian Faience,” AIHV 21 Istanbul, Turkey, Association internationale pour d'histoire du Verre (AIHV), Sep. 2018
- 山花京子・秋山泰伸 「東海大学古代エジプト及び中近東コレクション所蔵の硫黄製ビーズネックレスの復元に関する研究」 文化財修復保存学会第 40 回大会

【その他の活動】
- 「2000 年前に消えた古代エジプトの謎の物質「ファイアンス」を作ろう！」いばらき子ども大学県西キャンパス　2018 年 12 月
- 「古代エジプト・死者の書と来世の暮らし」日本セカンドライフ協会　2018 年 10 月
- 「古代エジプトのファイアンスを再現」東海大学新聞　2018 年 10 月
- 「文理融合研究により、古代エジプトの「ファイアンス」の再現に成功」東海大学研究推進部　2019 年 9 月
- ” Interdisciplinary team succeeds in reproducing Egyptian faience,” Research @ TOKAI, Sep. 2018
- 東海大学望星学塾「古代エジプト　ゼミナール」2018 年 5 月～ 6 月　全 3 回
- 東海大学地域連携センター「古代エジプト学入門」2019 年 1 月～ 2 月　全 3 回

篠原　聰

課程資格教育センター・准教授

【執筆・翻訳】
- 「触覚を活用した新たな博物館活動の実践」（『全日本博物館学会第 44 回全国大会要旨集』全日本博物館学会，2018.6）pp.59-60
- 「鏑木清方と金鈴社の人々」（『鏑木清方記念美術館叢書 21』鎌倉市鏑木清方記念美術館，2019）pp.200-201

【報告・講演】
- 市民講座「鏑木清方と郷土会の画家たち」鎌倉市鏑木清方記念美術館，2018 年 4 月 27 日
- 講演会 「近代美人画の諸相　鏑木清方と新版画の画家たち」町田市立国際版画美術館，2018 年 5 月 3 日
- 講演会 「触覚」の不思議な世界　ユニバーサル・ミュージアムの実践（於 . ニコムプラザさがみはら）2018 年 9 月 8 日
- 講演会 「美人画ってなんだろう？」小杉放菴日光記念美術館，2018 年 9 月 30 日

【その他の活動】
- 企画展「基本は現代文明論」展 , 松前記念館 , 2017-18 年度企画展
- 『世界のたね』（松前記念館 2018 年度ミニ企画展）報告書，松前記念館，2019 年 3 月
- 『思想史と人類学の対話　ユニバーサル・ミュージアムが「近代」を問い直す』イベント報告書，東海大学課程資格教育センター，2019 年 3 月
- 『彫刻と生きる』公開シンポジウム 4 報告書，東海大学課程資格教育センター / 松前記念館，2019 年 3 月

東海大学文明研究所所報 2018
発行人　山本和重
発行日　2019 年 3 月 31 日
発行所　東海大学文明研究所
神奈川県平塚市北金目 4-1-1　〒 259-1292　tel.0463-58-1211　ext.4900 ～ 4902　fax.0463-50-2050